

絵本と年齢

—ディック・ブルーナを中心に—

Picture books and age:
focusing on Bruna Dick

岡野純子

Junko Okano

Résumé

When children read pictorial books, they seem to have their own ways of reading, different from those of adults due mainly to their developmental stages. Certain books are favored by children of certain age, but their popularity diminishes as children grow. Dick Bruna's pictorial books are typical cases. They are cherished mainly by children of three to four years old, and the favor of children above five moves rapidly to other books. This paper takes up Dick Bruna's books, and explicates the reasons why they are favored only by three to four years old children and are much less favored by older children.

Findings from developmental psychology show evidences that pictures and texts of Bruna's books are basically understandable to children of ages three to four in terms of their cognition, thought, and language acquisition. Moreover, pictures and texts relate tightly with each other, both conveying the same stories. But often each of them contains the elements of the story which the other does not tell, so that pictures and texts compliment each other. These unity and complementarity give the whole book an exquisite balance between pictures and texts, an essential charm of Bruna's books.

- I. 絵本とは何か
- II. 子供が好む絵本
 - A. 年齢・男女別に見る貸出状況
 - B. 年齢に伴うブルーナ絵本の貸出状況の変化
- III. ブルーナ絵本の絵と幼児の認知・思考・知覚発達
 - A. 認知・思考の発達と絵
 - B. 知覚の発達と絵

岡野純子：慶應義塾大学文学部図書館・情報学科，東京都港区三田 2-15-45
Junko Okano: School of Library and information Science, Keio University, 2-15-45, Mita, Minato-ku, Tokyo 108, Japan.
1995年2月10日受付

絵本と年齢

- C. 色と輪郭線に関する調査
- D. ブルーナ絵本と認知・思考・知覚発達の不一致
- IV. ブルーナ絵本の文章と幼児の言語発達
 - A. 言語発達と文章
 - B. 言語を通じた物語理解の発達
- V. 絵と文章の一体化
- VI. 幼児の絵本との関わり方

I. 絵本とは何か

絵本は、主として、絵と言葉から成り立っている子供のための本で、生後10カ月前後から玩具として興味を持たれ始め、徐々に絵本として扱われるようになる。5歳位までの子供は、文章を読むことができないので、自分で絵本を読むのではなく、読んでもらいながら絵を読むのが普通である¹⁾。

子供は、まず自分の経験を軸にして、絵本の世界を理解する。そして、絵本の中で得られた知識やものの見方は、再度日常生活の中で生かされる。絵本は、実際の経験を頭の中で一般化し、定着することを助け、認識能力や想像力を育ててくれる。そして最後には、絵本そのものが存在する理由である、自分自身の経験や感じたこと、想像を絵や言葉で積極的に表わせるようになる。このように子供と絵本の関係は、絶えず、相互作用をしつつ深められ、優れた絵本だけがこの繰り返しの中で生き続けて行く²⁾。

絵本にとって、絵と文章は大事な構成要素である。

字が読めない子供も、読める子供も、内容を理解したり、物語を自分の心の中で映像にしたりするのに、絵に頼っている部分はかなり大きい。それだけではなく、絵は、文中の言葉で表現されていない部分をイメージ化しており、単なる言葉の解説や補いではない、時には言葉に代わるものである。

また、字が読めないのだから、幼児の絵本には、物語(文章)はいらないという考えが以前はあったが、「絵を読む」と言われる年頃の子供も、絵と同じように、あるいはそれ以上に、耳から聞く文章(響きや調子)を楽しんでいる³⁾。かつら文庫で、『じのないえほん』をばらばらめくっていた子供が、絵だけ見るのではなく、「お話を読んで」と言って来たり、「お話がないからつまらない」と言ってその本を書棚に戻そうとしていた子供に、「お話をしてあげるよ」と言って、一緒に物語を作りながら読んでやると、とても喜んでいたことがあった。繰り返

し文章を読んでもらい、繰り返し絵を眺め、それとともに生活の場では、見たり、聞いたり、食べたり、さまざまな経験を重ねるうち、初めは音であったり、リズムであったりした絵本の文章が、次第にイメージを伴い、実感を伴った具体的な言葉となって行き、やがて心を打ち、動かす言葉となる⁴⁾。

絵本とは、このように、文学でもなく、単なる絵の集合でもない、「絵本」としか言いようがないものなのである。

II. 子供が好む絵本

それでは、子供の好きな絵本とはどのようなものなのだろうか。かつら文庫(1974年に設立された私立児童図書館「東京子ども図書館」の母体となった家庭文庫の1つで、石井桃子先生のお宅に開かれている。)に通う3歳から6歳の子供の貸出記録をもとに見て行きたいと思う。尚、この文庫に通う子供達は、自分自身で本を選び、借りて行くのが基本である。

A. 年齢・男女別に見る貸出状況

1993年4月から1994年3月までの1年間に、子供達が借り出した絵本を集計し、貸出冊数の多いものから順に、1位から5位までを年齢別・男女別に表にした。(第1表)

この結果、絵本それぞれに性質があることが分かった。

まず、『バレエの好きなアンジェリーナ』は、3歳から6歳までの女兒に常に支持されているが、男児には全く興味を持たれず、それと同じように、『三だいの機関車』は、3歳から6歳までの男児に支持されているが、女兒には全く読まれていない。「女兒のみ、男児のみに幅広く支持される絵本」があり、これは、3歳頃からすでに男女の性差が存在していることを示しているのかもしれない。『11ぴきのねこ』も5歳女兒の2位に挙がっているが、一般的に男児に高い人気がある。

第1表 年齢別・男女別貸出状況

1993年4月～1994年3月

(女兒)

	3 歳	4 歳	5 歳	6 歳
1 位	うさこちゃんの絵本 ディック・ブルーナ文/絵	うさこちゃんの絵本 ディック・ブルーナ文/絵	バレエのすきなアンジェリーナ ホラバード文・クレイグ絵	バレエのすきなアンジェリーナ ホラバード文・クレイグ絵
2 位	バレエのすきなアンジェリーナ ホラバード文・クレイグ絵	ねずみさんのいえさがし ピアス文/絵	11びきのねこ 馬場のぼる文/絵	おやすみなさいフランシス ホーバン文・ウィリアムズ絵
3 位	ひとまねござる レイ文・絵	おやすみなさいフランシス ホーバン文・ウィリアムズ絵	ひとまねござる レイ文・絵	ねずみさんのいえさがし ピアス文/絵
4 位	ぐりとぐら 中川李枝子文・大村百合子絵	ひとまねござる レイ文・絵	くんちゃんのだいいりょうこう マリノ文/絵	ピーターラビットのおはなし ポター文/絵
5 位	ウォーリーをさがせ! ハンフォード文/絵	バレエのすきなアンジェリーナ ホラバード文・クレイグ絵	げんきなマドレーヌ ペーメルマンズ文/絵	タンタンの冒険旅行 エルジェ文/絵

(男児)

	3 歳	4 歳	5 歳	6 歳
1 位	三だいの機関車 オードリー文・ドールビー絵	三だいの機関車 オードリー文・ドールビー絵	ひとまねござる レイ文・絵	三だいの機関車 オードリー文・ドールビー絵
2 位	11びきのねこ 馬場のぼる文/絵	11びきのねこ 馬場のぼる文/絵	ウォーリーをさがせ! ハンフォード文/絵	ウォーリーをさがせ! ハンフォード文/絵
3 位	ひとまねござる レイ文・絵	ウォーリーをさがせ! ハンフォード文/絵	ピーターラビットのおはなし ポター文/絵	チムとゆうかんな船長さん アーディゾーニ文/絵
4 位	うさこちゃんの絵本 ディック・ブルーナ文/絵	ひとまねござる レイ文・絵	三だいの機関車 オードリー文・ドールビー絵	ピーターラビットのおはなし ポター文/絵
5 位	どろんこハリー ジョン文/グレラム絵	ぶたためききつねねこ 馬場のぼる文/絵	11びきのねこ 馬場のぼる文/絵	ぐりとぐら 中川李枝子文・大村百合子絵

『ひとまねござる』の絵本は、3歳から5歳の男女に良く読まれ、「男女ともに幅広く支持される絵本」であることが分かる。

『ピーターラビット』は、5,6歳になると、3,4位に姿を現し始め、「年長児になると支持が高まる絵本」であるのだろう。

この表の中で、最も注目したのは、Bruna, Dick が描いた『うさこちゃんの絵本』である。Bruna の絵本は、3, 4歳の女兒の第1位に挙げられているのにもかかわらず、5歳からは、突然ランキングから消えてしまう。

B. 年齢に伴うブルーナ絵本の貸出状況の変化

この状況をはっきりと確かめるために、3歳から6歳の男女における Bruna 絵本の1年間の総貸出冊数の変化と人気ランキングの順位を見ることにした。(第1図)

その結果、3,4歳の女兒に絶大な人気であった Bruna の絵本が5歳以降、急に読まれなくなることが分かっ

た。その傾向は、女兒に強く現れているが、男児にも、冊数的には女兒に劣るものの、同じように現れている。

さらに、3歳から6歳までの貸出記録が残っている、4人の女兒(男児よりも傾向が顕著に現れているので)を選び出し、1カ月ごとの Bruna 絵本の貸出冊数を集計し、それを折れ線グラフにした。(第2図) 縦軸は、1カ月に借り出した Bruna 絵本の冊数、横軸は、その子供の年齢を示している。(4人ともが3歳と同時に入会したわけではないので、グラフの始まりはまちまちである) ここでも、3歳から4歳までをピークに良く読まれていた Bruna 絵本が4歳半ば頃から減少し始め、5歳になるまでには、全く読まれなくなることが分かった。

なぜ、このような事が起こるのか。特定の年齢の子供達に好まれる Bruna の絵本をとらえるうえで、やはり、3,4歳という年齢が関係しているだろうということと、その時期の子供が Bruna 絵本をどのように見て、どのように聞き、理解しているかをみるために、発達心理学

を用いて明らかにしていきたいと思う。

尚、先程出て来た性差の問題や、幅広く読まれる絵本の存在についても重要であると思われるが、本論文ではあえて触れず、Bruna 絵本を取り上げ、その人気の秘密と、3, 4 歳という初めて絵本に出会った頃の子供達の絵本との関わり方を明らかにすることだけを目的とする。また、Bruna, Dick は、1927 年オランダに生まれた絵本作家で（グラフィックデザイナー）、『うさこちゃんの絵本』をはじめとする『子どもがはじめてであう本』など、全部で 80 冊の絵本を刊行し、20 ケ国語に翻訳され、5,800 万冊以上の絵本が世界中の子供達から今もなお愛されている⁵⁾。日本語訳は、石井桃子や松岡享子によってなされ、評価も高い。

III. ブルーナ絵本の絵と幼児の認知・思考・知覚発達

発達心理学における年齢の区分は、胎児期・乳児期・幼児期・学童期（児童期）・青年期・成人期・老年期の 7 つで、児童心理学の主な対象は、乳児期から学童期の終わりまでである⁶⁾。3, 4 歳児は、「幼児期」に当てはまり、その幼児期の発達心理学的特徴と、Bruna の絵本との対応づけを行っていくのだが、その方法として、1 章で示した、絵本の構成要素である「絵」と「文章（言葉）」の 2 つの側面に分け、この III 章では、絵と認知・思考・知覚発達、次の IV 章で、文章と言語発達というように、発達心理学の中でも、それぞれに関係深いと思われる発達との対応づけを行う。そして、III 章から IV 章を通して、3, 4 歳児の Bruna の絵本との関わり方を明らかにしたい。

尚、この時期の子供は、「興味を持つ」と「理解しやすい」ということの区別は曖昧で、ほぼ一致している。

A. 認知・思考の発達と絵

Jean Piaget は、認知発達段階を、感覚運動期、前操作期、具体的操作期、形式的操作期の 4 段階に分けている⁶⁾。幼児期の子供は前操作期にあたり、乳児期の子供が、「ここ」「いま」の目の前にある世界がすべてであったのに対して、目の前にある世界だけでなく、「ここに、今ない」世界をも認識できるようになってくる⁷⁾。

認知・思考の発達の特徴的なものは 7 つある。

1. 象徴機能

小石をあめ玉に見立てたり、鉛筆を電車にして遊ん

だりするというように、そこに不在の物を、それとは別の他の物でもって表現する働きを言う。（第 3 図）自分の中で、あめ玉とはどんなもの、電車とはどんなものということがイメージとして想定できていることを示している。このように、そこに存在していなくても、心の中に描き想定することができる働きを表象作用といい、象徴的行動の前提となっている⁷⁾。「ここに今ない世界」を「ここに今ある世界」としてイメージできるようになるということは、絵本を読むための前提となり、また、絵本を読むことによってより発達する機能である。

2. 代表作用・イメージ的思考

幼児は、ある事象や物の中から一番印象深く、また大事と思われる特徴部分を取り出して、それを中心にその物のイメージを形成して行く。（1 項で述べたイメージとは、そのようにして形成されたものである）それを代表作用と言い、イメージを中心に形作られた心的世界をイメージ的思考という⁷⁾。幼児は、生活経験が浅いため、個々のイメージは単純で、もの同士の関係も相互にきちんと区別されていない。だから、描かれる事物に備わった独特の特質を 1 つか 2 つだけ強調するイメージ、それも単純化されたイメージを与えられた方が分かりやすい⁸⁾。Bruna の絵本において、例えば、猫を描くときに、その特徴である目を際立たせていたり（第 4 図）、家は、三角屋根と四角窓というように、最も単純化された形で表されていたり（第 5 図）、幼児には理解しやすいことが分かる。漫画的に描かれた絵を子供が喜ぶのも、漫画がイメージにおける代表的特徴だけを取り上げ、それを誇張し、強調して描かれていることによる。Bruna の描くウサギ「うさこちゃん」も、実際のウサギとはかなり違っている。ウサギを描くときは、長い耳、兔唇、ヒゲが必要だが、うさこちゃんにはヒゲがない。耳は長い、口も×になっていて、おまけに三等身である。ウサギの一部の特徴を誇張し、他の部分は大胆に削除して、ウサギの形を取った「うさこちゃん」という Bruna 独特のキャラクターを作り出している。（第 6 図）

3. 図形の認識

3, 4 歳になると、図形の認識が確立し、円、三角、四角などの単純な形と、その組み合わせによる種々な形に対して注意するようになり、図案や模様への興味が起こる。三角形は山、楕円形は卵というように、幼児にとっ

形ある物は、何らかの具体的事物を表している⁷⁾。先ほど述べた、Bruna の家の形（三角屋根と四角窓）が幼児の興味を引く理由が理解できる。（第5図）

4. アニミズム

物も自分と同じように、生命を持ち、精神や意識を持つと認める現象を言い、幼児は、この世に存在するすべての物に意識があると信じている⁸⁾。Bruna の絵本に描かれている花に目や口がついていることも、幼児にとってはすんなり理解できることであり、当然のことなのである。（第7図）

5. 擬人化

幼児は、自分がよく知っている人間の持つ性質から、すべてを類推して理解しようとする⁹⁾。Bruna の絵本に登場する動物は、どれも擬人化されており、この絵本を読む幼児は、例えば、うさこちゃんシリーズの主人公「うさこちゃん」であれば、ウサギの子供と分かっていながらも、自分と同じ人間の子供として見ている部分もあるのだろう。

6. 自己中心的思考

イメージは、その事物の視知覚的印象を中心に形成されるので、幼児は、対象の目立つ1つの側面に注意が集中して、同時に他の側面にも注意を向けることが難しく、外からの「見え方」が変化すれば、物そのものも変化したとか、また別の物になってしまったと受け取ることが多い。つまり、「見え（…らしく見える）」と「事実（…であるということ）」の区別が十分分化してとらえられていない⁶⁾。また、そのことは、幼児が、見ている対象物が自分とは別に独立に存在していること（個別と一般の区別）をきちんと理解しておらず、物の相互の区別、関連づけはできていないことを示している。先に述べたアニミズムや擬人化も自己中心的思考と深い関わりがある。（イメージができることは、対象の独立を把握できることではあるが、幼児期ではまだ、イメージが単純で、対象の独立を把握するまでには至っていない）

よって、画面の中での遠近法は、誤解されることがあり、遠くを歩いている人間として小さく描かれる人物は、初めから小さな人間として単純に考えられてしまう。Bruna の絵本には、横顔は存在せず、すべて正面を向いている。（第6図）もし、横顔、正面顔が両方描かれていたら、横顔のうさこちゃんと、正面顔のうさこちゃん

は、全く別のウサギであると幼児は認識するかもしれない。また、Bruna の遠近法を排除した平面的図面は、自己中心的思考をしている幼児に最適であると思われる。

7. 因果的作因の発見

物事の原因と結果を以前より明確に認識し始めるようになり、そのため以前は単に絵の中の主たる事物を判別しては、「あ、これだ」というふうに一々列挙して喜んでいたものが、今度は絵の中で実際起っている事象をこれはこうだと以前よりは直裁に言えるようになる⁹⁾。（前のページを思い起こして、そのページの出来事の意味を把握しやすくしたりできる→同一人物のイメージが形成されつつあることが分かる）

B. 知覚の発達と絵

知覚の発達の特徴的なものは、3つある。

1. 知覚的探知

3歳児は、熟知していない図形を提示され、これを記憶するように求められても、かなり長い間1つの地点に視線を止め、全体の細部にまで視線を移動させることができない。これに対して、6歳児は、速くかつ行き届いた眼球運動で図形の全体を走査し、その形を決定する輪郭線に特に注意を払う⁹⁾。（第8図）だから、年少児には、中間色をふんだんに使い、輪郭のなよやかな絵、極端に抽象化されたり、象徴的に表された絵は、分かりづらく、原色とそれに近い色が見分けやすい。見分けやすい、見分けにくいということとは、色をはじめとする好き嫌いにも影響を与える。幼児は、より単純化されたタイプの絵を好む傾向があり、正確な遠近という意味で、絵が写実的であるとか、細部に細かな注意がほどこされているとか、本物に近い色づけがなされている絵は、7歳位になって好まれやすくなる⁸⁾。はっきりとした色を見分ける能力はあっても、微妙な色の違いにはあまり関心を示さない幼児の好む色は、赤・黄・橙・青などであり、（第2表）¹⁰⁾ 年齢が上がり、色の細かいところまで神経が行き渡ってくるようになると、明淡色に対する嗜好率が增える。（第9図）¹¹⁾ 赤・青・黄という三原色と緑を基本とした色彩を用いて、一本のはっきりとした線で輪郭を縁取っている Bruna の絵本は、幼児には、知覚しやすく、好ましいことが分かる。しかし、親しみのある、ある程度知っている事物に対しては、3歳児でもよく認知できる

絵本と年齢

第2表 幼児¹における色彩の嗜好²

順位	1	2	3	4	5	6	7
色	赤	黄	赤	赤 みの 橙	青	紫	青
相			紫	橙	紫		

- 1: 幼稚園児 50 名対象 (男児 21 名, 女児 29 名)
2: 日本保育学会大会研究論文集 第 39 回 (1986)

ことが分かっており⁹⁾、犬や猫、花といった幼児の生活の中で、親しみのあるものがふんだんに描かれている Bruner の絵本は、さらに幼児にとって、読み取りやすい絵であると思われる。

2. 部分と全体知覚

対象を全体として捕らえる知覚と、その対象の部分で捕らえる知覚とが成立しているが、3, 4 歳では、部分的知覚が全体的知覚に統合されていない⁹⁾。主たる動きが、それぞれ違う人物の間に広がって行くとか、一頁の中でも別の部分に及ぶ絵に直面すると、画面上の出来事の全体的な感じをつかむような系統立った目の配り方をすることができない。そのかわりに、行きあたりばったりに注意をこらし、主たる動きにあまり関わりのない細部をいたずらに重要だと見なしてしまう場合もある⁹⁾。しかし、Bruner の絵本では、主人公が、例えば「うさこちゃん」1 人というように、はっきりと決められている。一場面に 2 人以上の登場人物が出てくる場合でも、主人公だけが目立つ色の服を着ていたり、(第 10 図) 主人公以外の人物が大胆にも絵において削除されていたりしている。(第 11 図)

3. 弁別能力

対象間の差異を知る働きを「弁別 (discrimination)」という。日常生活に必要な弁別の多くは、経験を通じて学習されるが、3, 4 歳児では、経験がまだまだかなり制約されているために弁別する能力に乏しいので、描かれたものをはっきりととらえることができるように、太線で輪郭づけをすることによって背景と区別したり、描かれているものを持つ特徴をはっきりと提示することが望ましい⁹⁾。Bruner の絵は、黒い縁取りで対象物 (例 うさこちゃん) と背景が区別され、対象物と背景に同系色が使われることがなく、色分けがはっきりしており、対象物

の持つ特徴を際立たせていて、幼児の理解力を深めているものと思われる。

C. 色と輪郭線に関する調査

B 節の 1 項と 3 項で示したことを実際確かめてみるために、色と輪郭線に関する調査を行った。

かつら文庫に通う 3, 4 歳の幼児 (22 名) を対象に、紙に描いた 4 つの「うさこちゃん」、つまり、①原色の赤色のスカートをはき、原色の青色の背景で、輪郭線のある「うさこちゃん」(第 12 図)、②原色の赤色のスカートをはき、原色の青色の背景で、輪郭線のない「うさこちゃん」(第 13 図)、③明淡色のピンクのスカートをはき、明淡色の水色の背景で、輪郭線のある「うさこちゃん」(第 14 図)、④明淡色のピンクのスカートをはき、明淡色の水色の背景で、輪郭線のない「うさこちゃん」(第 15 図)の中から、一番好きな「うさこちゃん」を選ばせた。

結果は、①を選んだ子供は 21 人、②が 0 人、③が 1 人、④が 0 人であった。圧倒的に、原色で輪郭線のある絵を選ぶ子供が多かった。③を選んだ子供は、女の子で、ピンクという柔らかい色に引かれたと思われる。

D. ブルーナ絵本と認知・思考・知覚発達との不一致

Bruner 絵本と認知・思考・知覚発達とは、多くの面でも対応していることが分かったが、わずかな点で一致しなかった。まず、幼児は、静的なものよりも、動的なものを好む傾向があるのに¹²⁾、Bruner の絵本の登場人物は、どれも動きがなく、静的である。そして、喜び・悲しみ・苦しみ・怒り・驚きといった感情を絵本から読み取りにくい幼児にとって、抑えて描かれた表情の少ない絵は、理解できないのに⁹⁾、Bruner の絵本の登場人物は表情が乏しく、「ねむり」と「悲しみ」がわずかに目一つで描き分けられているだけである。

IV. ブルーナ絵本の文章と幼児の言語発達

言語発達は、「聞く」から始まり、「話す」「読む」「書く」「作る」という段階を経て行く。幼児期 (3, 4 歳) の子供は、「話す」「読む」段階に該当し、文字自体に興味を持つ時期である¹³⁾。

また、「言葉以前」「言葉誕生期」「一次的言葉期 (話言葉中心)」「二次的言葉期 (書き言葉と話言葉)」と発達段階を分ける方法もあり、この中では、「一次的言葉期」に当てはまる。言葉の世界に目覚め、言葉機能を身につけ始めた子供の段階で、この時期の特徴としては、(1) 特定

の親しい人(母親や先生)を相手に、(2) 一対一の会話を通して、(3) 現実的な生活場面の中で、具体的な状況と関連してコミュニケーションが行われる¹⁴⁾。

文字や言葉の世界に興味を持ち始めた、この時期の子供にとって、絵本は、まさに魅力的なメディアであり、信頼関係を結んだ大人が一対一で、子供に絵本を読み聞かせてやるのが最良であると思われる。

この節では、幼児期の言語発達における具体的な特徴とBrunaの絵本における文章の特徴とを対応づけながら、幼児とBrunaの絵本の文章との関係を明らかにしていきたいと思う。

A. 言語発達と文章

3, 4歳児は、書かれたものに対する興味が深まり、話言葉から書き言葉へと移行し始める時期である¹⁵⁾。絵本は、対話形式の話言葉とは違った「あらたまった」語り言葉・書き言葉であり、一次的言葉の世界から二次的言葉の世界への橋渡しをしていると言えよう。

1. 語彙

周囲の事象そのものへの興味だけではなく、それらの事象を言語的に表示し、理解することにも関心を示す。そのため、語彙数の増加が最も著しい時期でもある。3歳では、1000語、4歳では、1500~2000語の語彙を獲得する。言語獲得も、心を引き付けられるものの名称からなされていく。その状況を明らかにする調査が村石(1983)によって行われた。村石は、「動物」という1つの範疇に含まれる語を幼児がどれくらい言えるかということを見ることで、どのような動物を好ましいかと思ひ、その語をいち早く獲得したかが分かるとしている。(第3表)¹⁵⁾¹⁶⁾¹⁷⁾ その結果から見ると、3, 4歳児とも、象が1位に挙げられており、その他、上位に挙げられた動物は、Brunaの絵本の中に、頻繁に登場する動物と、ほぼ一致している。(第4表) Brunaの絵本は、特に幼児が親しみを感じ、興味を持っている動物を描いてあるので、より一層興味を引き、語の獲得、理解を容易にしているのだろう。

また、幼児の話言葉がいくら赤ちゃん言葉でも、心の中で言おうと思っている言葉は大人の言葉であるので、絵本は、大人の言葉で書かれるのが望ましい²⁾。幼児は、まさに自分が言おうとしている言葉の響きにひかれ、それを吸収しようとする。Brunaの文章は、すべてきちんとした正しい日本語で書かれ、また、リズムのある言葉

第3表 「動物」範疇における反応語(上位5位まで)出現率¹⁾

	順位	3歳児	4歳児
総出現の反応語	1位	象(41.0%)	象(69.0%)
	2位	ライオン(38.0%)	きりん(65.0%)
	3位	パンダ(30.0%)	ライオン(46.0%)
	4位	きりん(28.0%)	さる(35.0%)
	5位	さる(23.0%)	うさぎ(31.0%)
延べ語		396	645
異なり語		74	95

1: 村石昭三. 子どもの知的発達. (1983)より

第4表 ブルーナ絵本に登場する動物

うさぎ	牛	キリン	シマウマ
カンガルー	象	猿	ライオン
猫	犬	熊	豚
ふくろう	アヒル	ニワトリ	オウム

なので、幼児が実生活で、絵本場面と同じ様な状況に出くわした時に、それをそのまま真似をして口にする子供も多い。

2. 文法

3歳前後になると、接続詞を使って文をつなぎ、従属文・疑問文を用いることができるようになる。また、一文に使用する語も4, 5語に増える⁶⁾。Brunaの絵本には、従属文・疑問文がふんだんに取り入れられており、それらを使い始めたばかりの子供は、絵本を通して、従属文や疑問文に興味を持ち、より慣れ親しみ、自分のものとして、使いこなせるようになるのだろう。

また、一場面4行構成で、2行ごとに句点が打たれ、一文が4, 5語から成り立っているのだが、所々に、接続助詞を用いた、少し複雑な従属文も見られ、読み聞かせをする大人が、分かりやすいように、言い換えてやる必要もあるように思われる。しかし、リズムが良く、言いたいことが簡潔に、修飾が最小限にまで削られているので、ある程度カバーできている気がする。

また、時の概念は、幼児にとって獲得しにくく、「きょう」は理解しているが、「あした」や「きのう」という語を使ってはいけるものの、ほとんど理解していない¹⁸⁾。(第

第5表 時の言葉を使用する割合と理解度¹
時の言葉を使用する割合

時	年齢	3歳	4歳
あさって		1.4%	22.5%
あした		53.6%	81.7%
きょう		79.7%	93.0%
きのう		29.0%	66.9%
おととい		0%	9.2%

↑
時の言葉の理解度 (4歳児)
あした 53.0% きのう 0%

1: 教育心理学年報第33集(1994)より

5表) Bruna の絵本は、時間的な設定がなく、大部分の話が、その日一日で完結するようになっている。

3. 音韻

3, 4歳児は、言葉そのものに関心があり、しりとり遊び、リズム言葉、早口言葉など、言葉ゲームを喜ぶようになる¹⁶⁾。また、自分の話す言葉を聞くのがうれしくて、模倣を繰り返し、しゃべり始める¹⁵⁾。Bruna の絵本の原本(オランダ語)は、4行で書かれており、すべて2行目と4行目に韻を踏んでいる。日本語版(石井桃子訳)は、訳す時に、東京在住のオランダ大使館夫人による英語への正確な逐語訳と、Bruna 社から送られて来た英訳をもとにして、オランダ語の響きを慎重に配慮しながら、訳者の言葉で日本語に置き換えていったもので¹⁹⁾、一場面4行にまとめられていたり、ほぼ七五調で統一されていたり、原本のリズムや響きを大切にしている。(子安美奈子は、この調子がある呼吸法と一致していると指摘している²⁰⁾。)それに比べ、英語版では、リズムや響きは、無視されていると言って良い。Bruna の絵本の人気がアメリカでは、他の国々に比べて、少し劣る理由の1つなのかもしれない。(第6表)

『さいさなうさこちゃん』第1場面 七
おおきなにわの まんなかに——
かわいい いえがありました。 —五
ふわふわさんに ふわおくさん
にひきのうさぎがすんでいます²¹⁾。 調

第6表 英訳と日本語訳との違い

『おーちゃんのおーけすとら (I can make music)』は、オーケストラの11人のメンバーの名前と、担当している楽器を1人ずつ紹介していく話なのだが、日本語訳では、担当者と担当楽器の名前に、響きのうえでの工夫が見られるのに比べて、英語訳には、そのような試みは見られない。

楽 器	日本語訳	英語訳
ふるーと (flaute)	るーちゃん	I
りこーだー (recorder)	りこちゃん	Cathy
とらんべつと (trumpet)	とらんくん	Ben
ばいおりん (violin)	ばーびちゃん	Elizabeth
ちえろ (cello)	ちこちゃん	Sally
こんとらばす (double bass)	こんちゃん	Peter
ぴあの (piano)	ぴあちゃん	Penny
ぎたー (guitar)	たあくん	Jerry
はーぶ (harp)	はんなちゃん	Mary
だがっき (percussion instruments)	だいちゃん	Dan
おーけすとらのしきしゃ (conductor)	おーちゃん	David

また、単純なスタイル(例 言った)よりも、お話しスタイル(例 言いました)の方が幼児にとっては理解しやすい²²⁾。Bruna の文章は、すべて、「です」「ます」調で、しかも、「ね、そうでしょう」とか「ほら」などと、読み手に直接話しかけるような書き方が随所に見られる。

B. 言語を通した物語理解の発達

絵本の文章が読めない幼児には読み聞かせが必要である。(第7表) 絵本の中の一部である文字の機能を幼児なりに理解はしているが、一字ずつ分明ではないので、「文字の群れ」としてとらえている¹⁹⁾。しかし、文字が読めず、話す言葉が稚拙でも、聞いて理解できる言葉はたくさんあり、短いお話ならば楽しむことができる。子供が絵本の読み聞かせをしてもらって、その物語をどれくらい理解できるかということにも発達段階がある。(第8表) 3, 4歳児は、自分が今までに経験した事柄と、物語内容とが関連づけられる所だけを分かって楽しむ「主観的理解」から、物語がどんな展開をするのかを考えながら、それにかかわる情報を見つけて楽しむ「客観的理解」

第7表 絵本の文章がどれくらい読めるか¹

	3歳	4歳
1 読めない	79.1%	41.6%
2 一字ずつ拾い読み	8.9%	28.0%
3 時々間違うが、大体読める	2.1%	18.8%
4 すらすらと読める	0.8%	7.0%
5 その他	2.7%	1.8%
無記入	6.4%	2.8%

1: 村山貞雄. 日本の幼児の成長: 発達に関する総合調査(1987)

第8表 物語理解の発達段階

①段階	場面の理解 登場人物の理解	場面や部分への興味にとどまり、流れへの理解はできない段階。
②段階	主人公の行動の理解 話題の理解	幾つかの場面相互の関連がつき始め、次への予想も始まる段階。
③段階	物語構成としての展開の理解	物語の流れ全体を理解して、楽しむ段階。

3, 4歳児は、①段階から②段階への過渡期。

へと移行して行く時期である。また、生活経験を単に再現した物語を好むが、5, 6歳になると、空想性・創造性に富んだ物語を好むようになる¹⁷⁾²³⁾。Brunaの絵本は、Bruna自身も“どのページもそれぞれに1つの完結した作品として見れるようにしたい”⁵⁾と言っているように、全体として1つの流れのある物語でありながら、一場面、一場面でそれぞれ完結している。ストーリーも起承転結がはっきりし、最初のページと最後のページが呼応していたり(『ちいさなうさこちゃん』の第1場面は窓の開いている家の絵、最後の場面は窓の閉まっている家の絵である(第16図)), 同じ物体の向きの違いによって物語の初めと終わりを暗示している。(『うさこちゃんとゆうえんち』では、自動車の右向き、左向きで行き帰りを表現している。(第17図)『うさこちゃんどうぶつえん』では電車の向き、『うさこちゃんひこうきにのる』では飛行機の向き、『うさこちゃんじてんしゃ』では自転車の向きで表現)によって、まだ、場面の理解しかできない子供も、その流れを全体的に楽しめるようになった子供も、それぞれの読み方で、お話を楽しむこと

ができる。また、Brunaの絵本は、動物園や海に行った話、自転車に乗った話、誕生日の話など、子供の生活に密着した題材を扱っていて、空想的な話はない。そして、「ねむり」の場面で終わることが多い。

子供が文章を理解する方法にも発達段階がある。(第18図)これは、先に述べた物語の理解の発達にも密接な関係がある。どんな発達段階にいる子供でも、文章を文節ごとに区切って理解することは同じである。Brunaの絵本の文章は、点は使わず(年長児向けの絵本には、点が使用されているが)、文節ごとに区切られ、間が空いている。3, 4歳児は、意味と語順に頼って文章理解している。動作主は、必ず動物であり、もしも、「だれが」「だれに」というように、人物・動物が2人出てくる場合には、最初に出てきた人物・動物が主語であると判断する。よって、倒置文は、理解できない²³⁾。Brunaの絵本は、一文の中に出てくる動物は、基本的に1人になっているが、「だれが」「だれに」「なにをする」という文で、「だれが」「だれに」が共に動物の場合は、必ず動作主は、文頭に来ている。また、倒置文は使われていない。

V. 絵と文章の一体化

これまでに、Bruna絵本の「絵」と「文章」を発達心理学と対応づけながらそれぞれ見てきたのだが、「絵」も「文章」も、幼児にとって興味深く、また理解しやすいものであることが分かった。しかし、それだけでは、年齢に適した良い絵本であるとは言えない。絵本を評価する際に、心理学者も、絵本研究家も、一様に、「絵と文章の一体化」を最も重要な観点の1つとして取り上げ、こう述べている。

文章が絵の添え物、絵が文章の添え物であってはいけけないし、文章は絵を説明しているだけのもの、絵は文章を単に置き換えたものであってもいけない。文章も絵もそれぞれ良くて、その2つが不即不離、唇齒一体という関係にあって初めて良い絵本と言える。絵全体の調子やムードが物語のそれと合い、それぞれの表現の特徴を生かして有機的に結合していることが大切なのである。そして、絵と文章が一体となって語りかけてくる絵本は、物語の世界を豊かに展開し、聞き手の中にできる物語の世界のイメージを膨らませる¹⁾²⁾³⁾²⁴⁾。

絵本と年齢

Bruna 絵本は、まさに文章と絵が一体化している。III 章、IV 章で見てきた通り、Bruna の絵本は、絵も文章もそれぞれに単純で、幼児に理解しやすく、Bruna 自身も“文章と絵が自然に同化することで、より心を動かすものとなった”²⁵⁾ と言っているように、それらを組み合わせること（一体化すること）で、より効果を増している。絵に描かれた「もの」と文章中の「言葉」が一対一対応しており、また、一場面に描かれた「もの」同士の間関係と一文章の中の「言葉」同士の関係も一対一対応している。このような一体化は、従来の優れていると言われる幼児絵本にも見られて来たが、Bruna の絵本は、すべてが完全にこのような一対一対応をしているわけではない。絵が語っているから文章はより単純に、文章が語っているから絵はより単純にというような、ぴったりと一体化しているからこそできる単純化が随所になされているのである。これは、絵は、文章がなければ成り立たず、文章は、絵がなければ成り立たないほどの絶妙な一体化である。

絵にしても、言葉にしても、私は極端な単純化を行う。自分に不要と思われるものはどんどん省いて行く。単純なものにすると、子供達にイマジネーションの動く余地が大きく残されるからだ。ただし、ここで気をつけなければならないのは、限界を越え、省き過ぎてしまうことである。十分な表現力をもつシンプルなイメージを徹底的に追求しなければならない²⁶⁾。

という Bruna の言葉通り、一体化によって為される単純化によって表現力は乏しくなることはない。それどころか、ますます文章と絵が合い交わって、表現力豊かに読み手に語りかけてくる。そして、その単純化は、確かに、幼児の想像力を刺激している。

例えば、『うさこちゃんとうみ』の第6 場面、水泳パンツに着替えたうさこちゃんが立っている絵がある。(第19 図) 文章は、

それから うさこちゃんは ふくをぬぎ
すいえばんつをはきました。
とうさんは おどろいて いいました。
「おまえひとりで はけたのかい？」²⁶⁾

となっていて、当然、お父さんの問いかけに、うさこ

ちゃんが、「うん はけたよ」と答えるせりふがあるべきなのだが、絵がその前に、水着をビシッとはいていて、当然よという顔をしているので、この一文を省略し、「うん はけたよ」というせりふを幼児に想像させるのだろう。まさに、絵が語っているから、文が語らないのである。また、「おまえひとりで はけたのかい？」のせりふの後、ポーンとこの絵と言うように、文章と絵の間に、何とも言えない呼吸があることも幼児の想像を容易にしていると言えよう。

『うさこちゃんのにゅういん』の第6 場面では、同じ形の窓がたくさんついた病院の建物が描かれているのだが、(第20 図)「あたしの へやは どこかしら」という問いかけで文章が終わり、どこの部屋がうさこちゃんの部屋であるかが分からぬまま、ストーリーが進んで行く。子供が、1つ1つの窓を見ながら、うさこちゃんの部屋はどこだろうかと想像する様子が目に浮かぶ。

その他にも、『うさこちゃんとうみ』の第9 場面、うさこちゃんがバケツに貝を拾ったとあるのに、貝の絵しか描かれていなかったり、(第21 図) 第10 場面では、お父さんとうさこちゃんが一緒に海で遊び、すぶぬれになったとあるのに、絵には、うさこちゃんだけで、父親は描かれていない。(第22 図) 読み手は、それぞれ自分の経験に従って、描かれていない部分を自由に想像することができる。自由に想像するといっても、Bruna の絵や文章は、あくまでも分かりやすく、筋も十分に追え、経験不足の幼児に、でき得る範囲の自由な思考の余地をほんの少し与えているという程度である。そして、このことも絵と文章の一体化が前提となっているのは、言うまでもない。絵と文章のバランスが崩れれば、幼児の物語理解を阻害したり、混乱させたりしてしまう。物語自体に広がりを持たせるようなものでなくてはならない。

バランスが崩れた例としては、自由訳をしている Bruna 絵本の英語版が挙げられる。原本に近いと言われる日本語版との比較から、それを見て行くことにする。

例えば、『ちいさなうさこちゃん』の第2 場面の絵は、うさこちゃんのお父さんであるふわふわさんが、花に水をやっているシーンなのだが、(第23 図) 日本語訳と英語訳にかなりの違いがある。

『ちいさなうさこちゃん』第2 場面
〈英語訳〉

Mr. Rabbit liked gardening.

He grew roses, tulips and sunflowers.

He weeded the flowerbeds
and watered the flowers each day. 27)
らびっとさんは にわしごとが すきでした。
ばらや ちゅーりっぷ ひまわりを そだててい
ました。
かだんから ざっそうを とったり
まいにち はなに おみずをやりました。

〈日本語訳〉

ふわふわさんは にわにでて
はなに おみずを やりました。
ね ひとつひとつ ちゃんと
おみずをかけて やってます²¹⁾。

波線は、絵からは読み取ることができない部分を示している。英語訳は、文章が絵からかなり内容飛躍しており、絵に比べて文章に多くのことが盛り込まれ過ぎている。この絵を見ながら文章を聞く子供は、ばらやチューリップやひまわりの花を絵から読み取ることができず、また、雑草を取るふわふわさんを想像することが難しい。また、『ちいさなうさこちゃん』の第4場面にも、同じことが言える。(第24図)

『ちいさなうさこちゃん』第4場面

〈英語訳〉

She bought lettuces and beans,
peas and cabbages.
a juicy pear,
as a special treat.
Once she bought²⁷⁾
おくさんは れたすとまめ
えんどうめと きゃべつを かいました。
そして とくべつな ごちそうとして
みずみずしい ようなしを かいました。

〈日本語訳〉

ふあふあおくさんの かいものは
さやえんどうに おいしいなし。
えんどうは おくさんがたべるため
なしは ふあふあさんに あげるため²¹⁾。

英語訳の場合、この場面の絵からは、レタス、豆、キャベツを探すことができず、幼児は、絵で描かれている二

つが、果たしてレタスなのか、豆なのか、キャベツなのか、洋梨なのか、さやえんどうであるのかが分からない。しかし、日本語訳であれば、絵に描かれているものが、「さやえんどう」と「なし」であることをはっきりと認識できる。

英語訳の文章は、全体を通して、絵とのバランスが崩れている。内容的に絵から離れ過ぎたり（幼児の想像力では補いきれない）、物語の枝葉の部分を書き込み過ぎるので、幼児を混乱させ物語理解を阻害している。日本語訳の文章は、絵とのバランスがとれ、Brunaの意図と絵のイメージを生かす呼吸を感じる。絵と文章のバランスを保つこと、それらが一体化することは難しく、いくら絵と文章がそれぞれ分かりやすくても、バランスが崩れれば、物語世界を破壊してしまう。絵と文章の関係は非常に重要であることが分かった。(第25図)

以上のように、単純化による一体化に成功したBruna絵本は、「場面の理解」段階の3,4歳の子供に、より良く話の理解をさせるだけでなく、想像力を働かせる余地を新たに生み出した。しかし、「話題の理解」や「展開の理解」段階の子供になると、想像力も発達し、簡単すぎて、想像力を刺激されない。また、単純化された絵、単純化された日常的な物語では物足りなくなるだろうし、かといって、ストーリーだけを複雑にしても、絵に頼る度合いが増えるのにもかかわらず、絵の表現力が乏しく、絵と文章の一体化が崩れ、子供の物語理解に支障を来す。Brunaのうさこちゃんシリーズを初めとする『こどもがはじめてであう本』シリーズが絶大な人気を誇っているのに、それより年長児向けに描かれたBruna版『シンデレラ』や『赤ずきんちゃん』が評価されず、子供に興味をもたれないのは、そのような理由からではないだろうか。5,6歳の年齢になるとパッと読まれなくなるのも、同じ理由からではなからうか。

Brunaの絵本は、あの文章であるからあの絵がふさわしく、あの絵であるからあの文章が良いのである。だからこそ、絵と文章の絶妙なバランス、そして一体化を成し遂げることができたのである。まさに3,4歳の子供にぴったりの絵本だと言えよう。

VI. 幼児の絵本との関わり方

ここで、最後に、III章のD節において、問題として残っている部分に触れておこうと思う。

Bruna絵本の日本語訳をなされた石井桃子先生にお会いした時に、次のようなことを伺った。

Bruna は、絵本を作るうえで、教育的なものではなく、日常生活の「うれしさ」「たのしさ」を表したいと言っていた。子供達がこの絵本から「うれしさ」「たのしさ」を感じているのは確かで、ここまで、作者の意図がストレートに伝わっている絵本は少ない²⁹⁾。

表情が乏しく、しかも、「うれしさ」「たのしさ」が絵として描かれていないのに、それらをストレートに感じ取れるのは、なぜなのだろうか。ここでは3つの答えを考えてみた。

①Bruna は、機械的な方眼紙などは一切使用しない。最初、トレーシングペーパーに形を決め、それを画用紙に写し、愛用の鉛筆で線を描いて行く。気に入った線が描けるまで何枚でも何十枚でも描く。たった一枚の絵に百枚以上描き直すこともあったそうである。決してホワイトで消したり、修正したりしない¹⁹⁾。Bruna の線描は図形ではなく、絵であって、感情がこもり、物語をその線が語るまで描き続ける。彼の線は、「画家の内面の感情やイメージを形象し、メッセージを伝える線」であると言われる。また、表情1つにしても、Bruna は、目を表す2つの点（はじめ真ん丸であったうさこちゃんの目は、表情を出すために縦長の楕円に変わった）と、鼻と口で、例えば喜びの表情を描く時に、ちょっとうれしい表情と、もう少しうれしい表情の差を出すためにいろいろと努力し、求める表情を正確に描くのにかなりの時間をかけている⁵⁾。これらは、Bruna の絵の暖かさ、親しみやすさの秘密であり、一本の線にも、一見無表情に見える表情1つ1つにも、「うれしさ」「たのしさ」を伝えたいという作者の凝縮した思いがこめられ、その気持ちが絵本を読む子供達にも届いているのかもしれない。（このことを絵本作家五味太郎は、“取って取って骨を見せて、どれくらい削り取ったかを想起させるテクニク”と言っている²⁸⁾）

②Bruna 絵本の色彩にも、「うれしさ」「たのしさ」が伝わる秘密が隠されているような気がする。Bruna の絵本には、ブルーナカラーといわれる6つの色（赤・青・黄・緑・灰・茶）が使われている。

青はよそよそしい色だ。冷たい色であり、あなたから去っていく色である。それに反して、赤と緑はあなたのほうへやってくる暖かみのある色である。…青は冷たい寒い時を描くときに使う。子供達が家の中にいる時は赤か黄色のバックにする。彼らが家の

中で暖かくしてられるように描きたいからだ²⁹⁾。

と、Bruna が言っているように、Bruna は、それぞれの場面について一番ふさわしい色を割り当て、とりわけ、各場面のバックの色は、Bruna の色に対する意識が顕著に表されている。うさこちゃんが誕生する場面では、目を見張るようなあざやかな黄色がほどこされ、息をのむような強い印象を与えたり、動物園に連れて行ってもらえるうさこちゃんの喜びを橙のバックで表したり、Bruna の使う色彩は、1つの視覚言語として読者に伝わっているのかもしれない。

③III章の弁別能力に関わるものであるが、「ねむり」「悲しみ（泣く）」というのは、年少児が一番最初に理解できる感情である。だからこそ、「ねむり」と「悲しみ」をはっきり描き、それらとは区別し、際立たせるために、あえて「うれしさ」を描かず、切り落としたのではないだろうか。それによって、子供達は、「ねむり」や「悲しみ」とは違う感情「うれしさ」を弁別し、想像力によって、呼び起こすことができたのかもしれない。

確かに、疑問点は存在するが、全般的に見て、Bruna 絵本は、絵も文章も幼児にとって理解しやすく、単純化による一体化によって、表現力を増し、しかも幼児が想像する余地も与え、まさに、年齢にあった絵本が存在していると言って良いだろう。

その他にも、例えば、全12～13ページ構成の、ビニール加工がほどこされた16センチ四方の正方形という絵本の体裁も、幼児が抱えて遊ぶのには都合の良いものである。幼児にふさわしいサイズと材質の絵本は、Bruna の絵本以前は見られなかった²⁹⁾。

3,4歳という幼児は、認知能力にしても、言語能力にしても、発達途上であり、絵や言葉をイメージ化することも難しい。年長児と違ってどのような絵本でも読める訳ではない。よって、3,4歳という年齢にあった理解しやすい絵本というものが必要となってくる。Bruna の絵本は、まさに、「はじめての絵本」の役割を果たすべきものなのである。

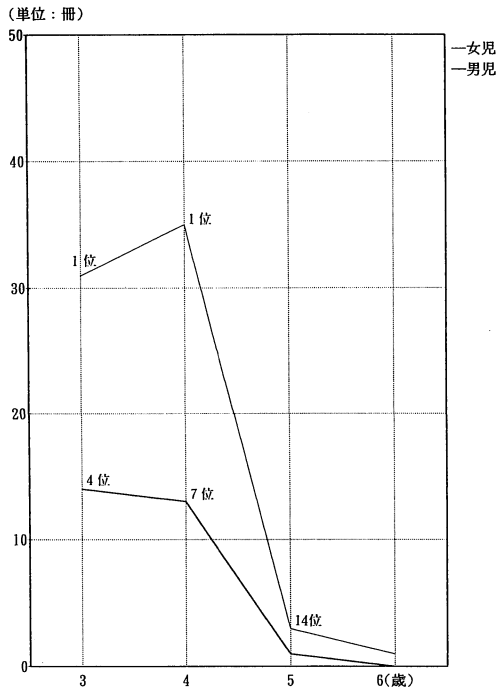
しかし、いくら年齢に適した絵本があったとしても、それを読み聞かす大人との信頼関係がなければ、絵本の物語世界との出会いは実現されず、無意味なものになってしまう。幼児において、絵本を読むということは、自分に語りかけてくれる人（母親や先生）の確かな愛情と、それを確認する喜びを得たいということでもある³⁰⁾。そのような喜びを伴いながら、幼児はお話そのものの世界

に引き込まれ、話すと聞く者の、目と目で通い会える喜び、心地よい響きを伴った肉声からのメッセージ(愛情)を全身に受け止めながら、やがて幼児はもう1つの世界(イメージーションの世界)に身をゆだねて行く。絵本というものは、大人と子供の間に存在することにより、最も価値高いものとなる。年齢にあった絵本の存在と、それを読み聞かす人の愛情、これら2つが、幼児が絵本と関わるうえで、最も大切なものとなってくるのだろう。

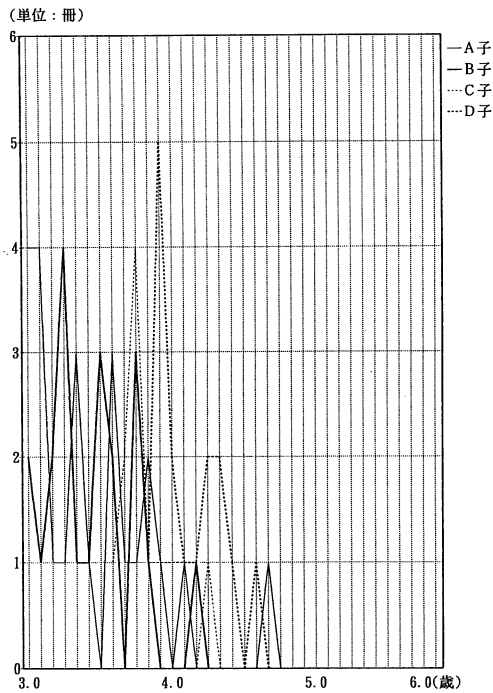
注・引用文献

- 1) 山岡寛章. 子どもと絵本 上巻. 東京, コーキ出版, 1982, p. 170-171
- 2) 佐々木宏子. 絵本と想像性. 東京, 高文堂出版社, 1975, p. 95-96
- 3) 山岡寛章. 子どもと絵本 下巻. 東京, コーキ出版, 1982, p. 108-120
- 4) 松岡享子. えほんのせかいこどものせかい. 東京, 日本エディタースクール, 1987, p. 8-67
- 5) 白泉社. “ディック・ブルーナのすべて”. MOE. Vol. 15, No. 10, p. 6-31 (1994)
- 6) 野呂正編. 幼児心理学. 東京, 朝倉書店, 1983, p. 47-75
- 7) 岡本夏木. 児童心理. 東京, 岩波書店, 1991, p. 77-89
- 8) タッカー, N. 子どもと本. 定松正訳. 東京, 玉川大学出版部, 1986, p. 45-124
- 9) 村田孝次. 児童心理学入門. 東京, 培風館, 1990, p. 64-92
- 10) 金村美千子. “幼児の色彩好悪について”. 日本保育学会大会研究論文集. Vol. 39, p. 486-487 (1986)
- 11) 千々岩英影. “色と子ども”. 児童心理. Vol. 42, No. 12, p. 1605-1608 (1988)
- 12) 佐藤公代. 絵本の挿絵の役割に関する研究. 東京, 近代文藝社, 1993, p. 83-94
- 13) 永野茂史, 依田明編. 乳幼児心理学入門. 東京, 新曜社, 1984, p. 130-131
- 14) 岡本夏木. ことばと発達. 東京, 岩波書店, 1985, p. 22-69
- 15) 岡本夏木編著. 認識とことばの発達心理学. 京都, ミネルヴァ書房, 1988, 308p.
- 16) 波多野完治. 子供の発達と教育 4. 東京, 白水社, 1977, 323p.
- 17) 川上清文 ほか. 図説 乳幼児発達心理学. 東京, 同文書院, 1990, p. 124-148
- 18) 麻生武. “発達部門(乳・幼児期): 研究者の立場から見たわが国の乳幼児発達研究のフロンティア”. 教育心理学年報. Vol. 33, p. 39-52 (1994)
- 19) 松居直. 絵本の時代に. 東京, 大和書房, 1984, p. 78-101
- 20) 石井桃子先生談
- 21) ディック, ブルーナ. ちいさなうさこちゃん. 東京, 福音館書店, 1964,
- 22) 池上喜美子. “発達部門(乳・幼児期): 乳幼児期の発達研究の動向”. 教育心理学年報. Vol. 32, p. 32-40 (1992)
- 23) 福沢周亮編. 子ども言語心理: 幼児のことば. 東京, 大日本図書株式会社, 1987, p. 95-140
- 24) 松居直. 絵本とは何か. 東京, 日本エディタースクール出版部, 1973, p. 68-77
- 25) エラ, ライツム. ディック・ブルーナの世界. 今井祥智訳. 東京, 駸々堂出版, 1992, p. 62-63
- 26) ディック, ブルーナ. うさこちゃんとうみ. 東京, 福音館書店, 1964,
- 27) Bruna, Dick. MIFFY.
- 28) 五味太郎. 絵本をよんでみる. 東京, リプロート, 1988, p. 9-45
- 29) 鳥越信. 絵本の歴史をつくった20人. 大阪, 創元社, 1993, p. 166-178
- 30) 日本子どもの本研究会編. 子どもの本の学校. 東京, ほるぷ出版, 1986, p. 528-529

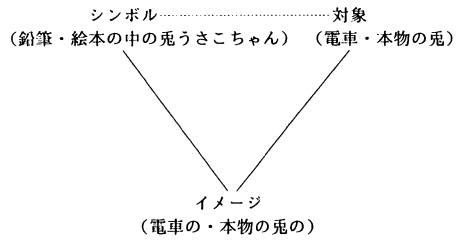
絵本と年齢



第1図 ブルーナ絵本の総貸出冊数と人気ランキングの変化

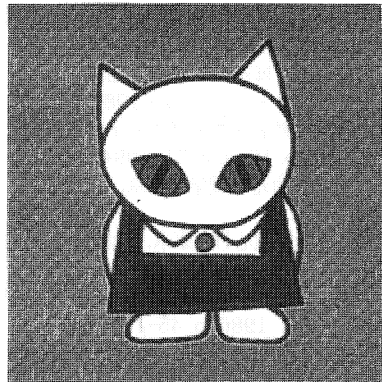


第2図 ブルーナ絵本の貸出冊数の変化

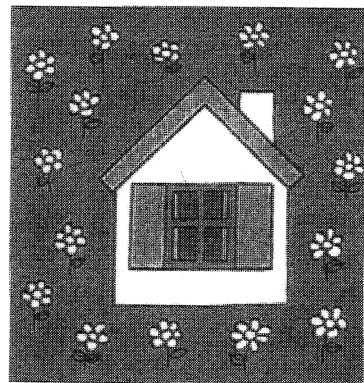


シンボルという記号を用いることによって虚構の世界を作り出している。

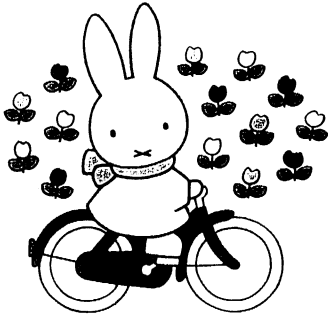
第3図 象徴機能



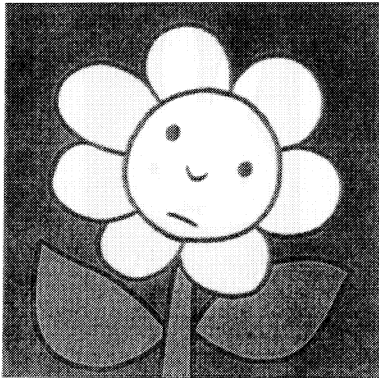
第4図 「こねこのねる」より



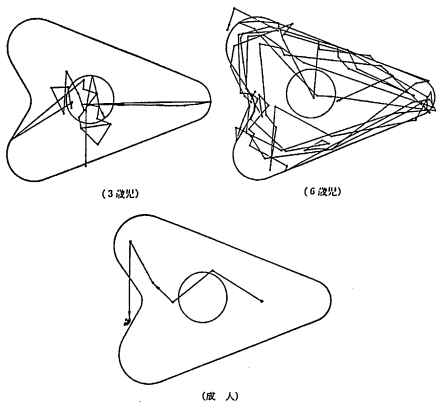
第5図 「ちいさなうさこちゃん」より



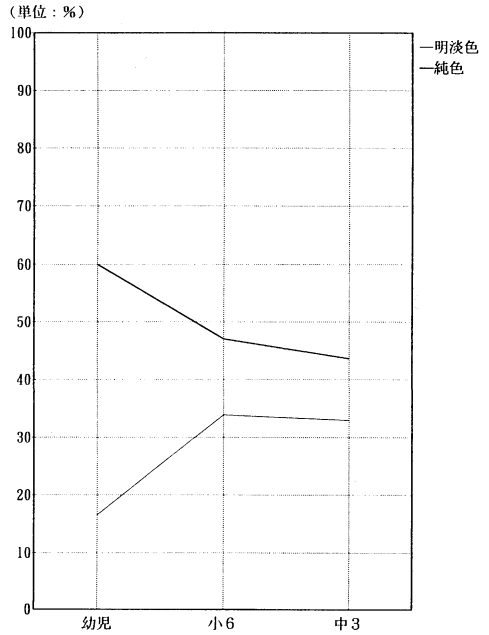
第6図 「うさこちゃんとじてんしゃ」より



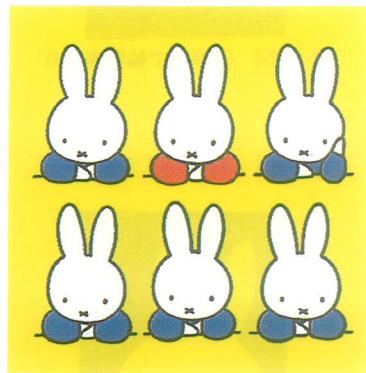
第7図 「こねこのねる」より



第8図 3歳児と6歳時の眼球運動¹⁾
1: 幼児心理学 野呂正著 (1983) より

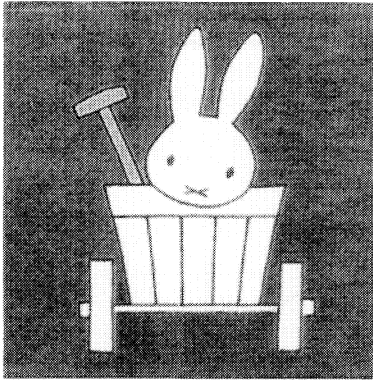


1: 児童心理 42 (12) 色と子ども から集計 (1988)
第9図 年齢別に見た明淡色・純色の嗜好率の変化

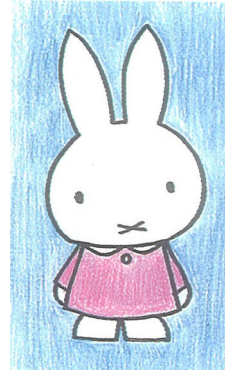


上段真ん中の赤い服を着ているのがうさこちゃん
第10図 「うさこちゃん がっこうへいく」より

絵本と年齢



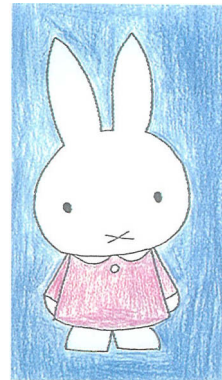
お父さんが、うさこちゃんの乗る車を押しているはずなのだが、主人公のうさこちゃん以外は削除されている。
第11図 「うさこちゃんとうみ」より



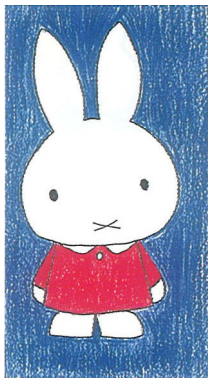
第14図 ③明淡色で輪郭線あり



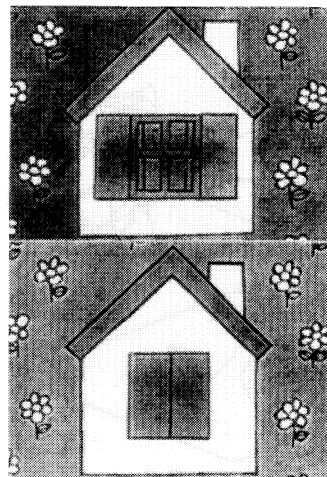
第12図 ①原色で輪郭線あり



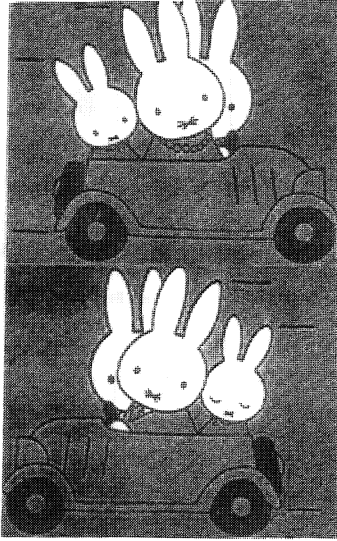
第15図 ④明淡色で輪郭線なし



第13図 ②原色で輪郭線なし

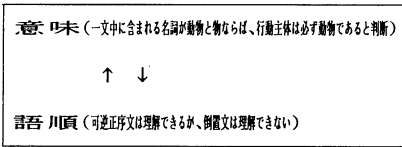


第16図 「ちいさなうさこちゃん」より
第1場面(上)と最終場面(下)



第17図 「うさこちゃんとゆうえんち」より
行き(上) 帰り(下)

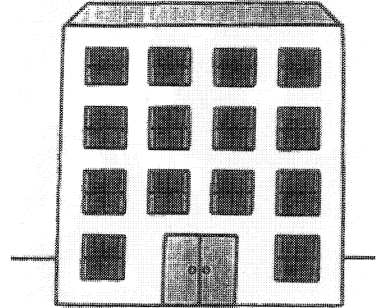
① 自己中心(行動主体は必ず自分)



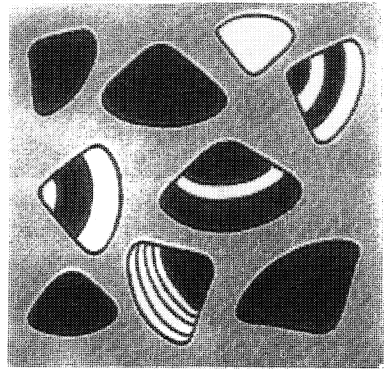
③ 助詞(文法的な関係で理解)

3、4歳児は、枠内の第②段階に当てはまる。意味と語順は、順不同。

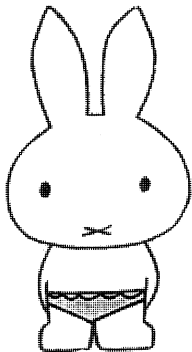
第18図 文章理解の発達段階



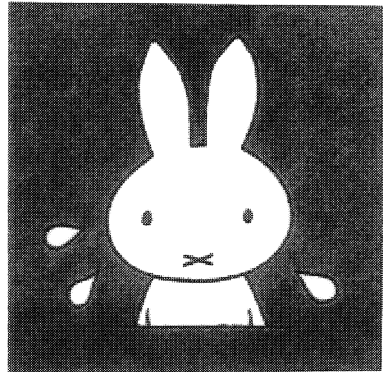
第20図 「うさこちゃんのにゅういん」第6場面より



第21図 「うさこちゃんとうみ」第9場面より

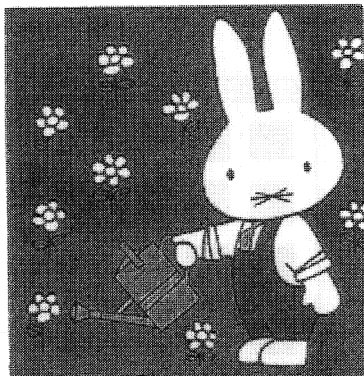


第19図 「うさこちゃんとうみ」第6場面より

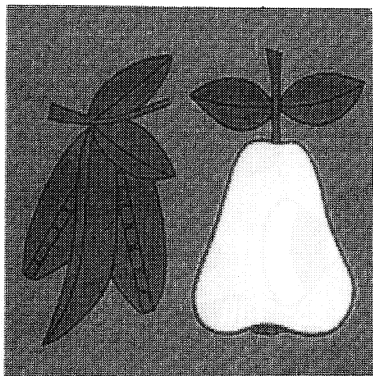


第22図 「うさこちゃんとうみ」第10場面より

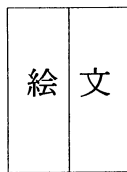
絵本と年齢



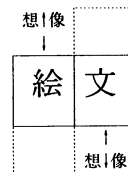
第23図 「ちいさなうさこちゃん」第2場面より



第24図 「ちいさなうさこちゃん」第4場面より



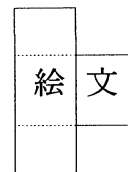
従来の絵と文章の一体化。
文章とともに絵が流れ、
一対一対応している。



単純化による一体化。
省略した部分は想像力を
働かせ補う。
ex. Bruna絵本



文章が説明的でどくどく、
絵から離れ過ぎて、幼児
の想像力ではカバーでき
ず、物語理解に支障を来す。
ex. 英語版Bruna絵本



文章に比べて、絵が描き
込み過ぎて、幼児の想像
力ではカバーできず、物
語理解に支障を来す。

第25図 絵と文章の関係

Illustrations Dick Bruna, ©copyright Mercis b. v., 1953-94.